

高橋鑑種の大宰府入り

高橋鑑種は大友氏の有力家臣で、大友氏の筑前支配の拠点の一つである大宰府の岩屋・宝満城督となり、のち大友氏に反乱を起こした人物です。この鑑種が大宰府に入った時期については史料によって齟齬があり確定していません。

『歴代鎮西要略』『歴代鎮西誌』は天文21年(1552)に宝満城に入ったとします。

『大友記』は弘治3年(1557)7月7日に秋月氏追討に功績をあげ、その褒美として岩屋城に入ったとします。横岳古文書所収年末詳覚書には永禄2年4月10日に宝満・岩屋城を賜ったとあります。

これらの史料はいずれも後世のもので信用がおけません。これまでは弘治4年9月7日付の観世音寺関係の文書に鑑種が安堵の花押を据えていることから(松平頼寿氏所蔵文書)、それ以前の城督就任を推測するにすぎませんでした。

この問題を考察するにあたり、重要な情報を与えてくれるのが永禄2年以降あまり下らない時期の成立と

考えられる角信順覚書(太宰府天満宮文書)という史料です。この中に

弘治3年12月の出来事として鑑種と小鳥居氏とが大宰府天満宮の祭礼を行ったことが記され、「郡役高橋左衛門大夫鑑種」とみえます。この時点で鑑種が御笠郡代であることが分かります。さらにこれを不服とした信順は鑑種に直接訴えるのですが、

12月16日に「岩屋へ登城」したとあり、鑑種が岩屋城に在城していたことが分かるのです。大内時代に筑前国では郡代がしばしば城督を兼ねることが指摘されています。岩屋城も御笠郡代の飯田興秀が在城していたのですが、鑑種の場合も御笠郡代Ⅱ岩屋城督と考え、大過ないと考えられます。

以上の検討から少なくとも弘治3年12月以前に鑑種は岩屋城督に就任して大宰府入りしたと考えられます。上記史料のうちでは『大友記』の記述に最も整合性があると思われるのですが、いずれにせよ後世の編さん物を利用する場合には一次史料とつきあわせ内容を吟味することが重要です。

太宰府人物志

資料室だより⑨